



講談シリーズ1

お花の仇討

—大岡政談傑作選—

松井高志

ON-BOOK

The wisdom of Ooka Echizen (2003)

目次

| | | |
|---------|--------|-------|
| 3 | 2 | 1 |
| なきがらの行方 | 彦兵衛の災難 | お花の仇討 |
| 219 | 117 | 5 |

- 原著者名 …… 「大岡政談」幕末～明治期成立、翻訳のテキストとして使用したのは
明治19年「松田阿花之伝」（東京正札屋） Ⅱ 1、
明治29年「繪本大岡政談大全」（大川屋） Ⅱ 3、
明治31年「小間物屋彦兵衛」（同） Ⅱ 2（一立齋文車口演、今村次郎・宮沢彦七速記）
- 原著者名 …… 不明（不特定多数）
- 投稿者氏名 …… 松井高志

1

お花の仇討

一

「鐘ひとつ売れぬ日はなし江戸の春」と其角の句にいう。これは徳川の世に、江戸という大都會が大層栄えたことを、たった十七文字に読み込んだ傑作であるが、実にその頃の江戸の町々の繁栄とこの土地は今日の想像以上の、それは言葉に表せぬくらい大変なものであった。とりわけ、神田という土地はそのまた江戸の中の江戸というべきところだった。この繁盛この上もない神田の町並みにある商家の一軒に、津の國屋松右衛門という小間物屋があった。彼は商売相応に、不自由なく暮らし、妻のお八重との間に一男一女をもうけていた。長男を松吉といい、これには既に嫁があった。長女をお衆と云って、こちらは浅草田原町の花房屋弥吉という者のところに嫁がせていて、夫婦仲も暮らし向きも良い。というわけで、松右衛門もお八重も、もう松吉に身代を譲り、隠居して老後を安樂に送るのを樂しみにして暮らしていたわけである。

ところがそんな矢先、ふと仕入れの目利きが狂つてから、みすみす損をすることが二、三回重なつた。それがケチのつき始めで、どうも商売がうまく行かない。元来思ひこむタイプの松右衛門は、心痛から氣鬱の病を発し、とうとう床に着く羽目になつた。一家の心配は一通りではない。医者よ薬よと、あちこちと手を尽くしてみたが薬石効なし、看護には怠りなかつたけれども、これが

命数というのか、とうとう松右衛門は四十二歳ではかなくこの世を去ってしまった。

不幸というのは続くもので、今度は惣領息子の松吉が、どうも風邪らしいといって寝込んだ、ところがこれも実にあっけなく冥土黄泉の客となつてしまった。後に残つた母と嫁の嘆き悲しみは言うまでもない。涙もとつくに涸れ果てて、暗夜に灯火を失つたかのような気持ちで、ただ呆然と座っているばかりである。

この二人の嘆きに追い打ちをかけるように、商売上の借金の支払いや諸雑費の払い、生活費などで、家・蔵はもとより、家財ごとごとく売り払うことになった。それでも追いつかない。母子でいろいろ工夫思案してみたが、なにせ女の身、大金を工面するのは容易でない。

「これは浅草のお糸に相談するしかないね」

と、実の娘を呼んでどうにかならないものかと相談してみた。ところが、このお糸という女は元々かなり性格が悪い。自分たちの都合ばかり言い立てて、結局一向に実の母のために世話を焼かなかつた。ために母のお八重は大層腹を立てた。

「親の難儀を見捨てて平気でいるとは見下げ果てた人非人、鳥や獣にも劣るヤツだ、もう親でもなれば子でもないぞ」

と歯ぎしりしたが、他に思案があるわけではない。家財をすべて売り払つて後は、嫁と一緒に浅草諏訪町で裏長屋を借りて、洗濯やささやかな賃仕事をして、細々と生計を立てた。嫁のお菊は、実にかいがいしく働き、孝養を尽くしたため、姑のお八重も喜んで、貧しいながらも仲良く暮らした。このお八重はまだ二十を一つ二つ出たばかりであつたので、

「後家を通させるのも気の毒である、良い婿を取るか、または新たに良い縁談でもあればその方がお菊さんのためだ。そうすればあの人も一生幸せに暮らせるだろう」

とお八重は元より知人たちも考えて、そのように勧めるのであったが、お菊はまったくこれに耳を貸さなかった。

「お母様や皆様の仰せにそむくようですが、今更婿を迎えれば、亡くなった旦那様に申し訳が立ちません。お母様がご安心くださるということでしたら、あえてイヤとも申しませんが、今婿を取れば、その方にどうしても気兼ねして、お母様への孝行もこれまでのようには行かなくなってしまう。ですから望んでそうしようなどとは思いません。まして今更よそへ縁付くなど、思いもよらないことでございます。こればかりはご勘弁ください」

とはねつけて、全く承諾する気配がないので、その志を無にもできず、やむをえずそのままにしていた。

このような状態で月日が経過したが、姑のお八重はある時、ここまでの無理がたたったのか、持病の癩が出て寝込み、次第に枕も上がらぬ有様となった。お菊は大いに心配して、さまざまに看病し、神仏にも祈ったのであるが、どうしても効果はなく、とうとう半身が効かず、腰も立たない。自分だけでは三度の食事さえ摂れない体となった。けれどもお菊はたゆまず、昼はひねもす賃仕事や注ぎ洗濯、夜はよもすがら糸繰りなどをして薬代から、病人の口に合う食物をととのえて、約二年の日々をわき目もふらず、看病一筋に費やした。けれどもお八重の病状は思わしくなかった。

そんな享保四年師走半ばのことである。お八重の長患いで治療費、食費などいろいろと物入り

で、女一人の細腕ではなかなか諸方への支払いもままならない。三度の食事にも不自由する状態となった。借金はいろいろと言ひ拵えて支払いを待ってもらっており、暮れになったからにはせめて半分でも払わねばならぬが、その金の工面も思うようにならない。相談相手になるべき人は田原町のお衆、と分かり切っているが、母の長思いの間、やっとたつた一度見舞いに来たきりで、その時も体の具合を案じて優しい言葉をかけてやるでもなく、けたたましく芝居の話などをして、さつさと帰っていつてしまった。それっきり見舞いの使いをよこすでなし、薄情もここに極まった観がある。実の母の病気を案じないというのは、まったく人非人、人の道を踏み外しているともお菊は心中思った、が、この怒りを腹の中にぐつとしまつて、一人ひたすら身を削るように稼ぐ、が、やはり焼け石に水であった。どうしたらいいだろう、と一人悩んでいたが、悩んでいるのを母に悟られてはならない。一人この悩みを顔に出さずに苦しむうちに、とうとう押し迫って二十五日になった。四、五日のうちに金を作らねば、もう母に薬も食事も与えられぬ。もはや悩んでいる段階ではなくなった。考えていても金が降つては来ない。いっそ田原町へ行き、難儀を打ち明けてどうか頼み込めば、ここまでせつぱつまっているのだから、普段はああでも、切るに切れない親子の仲とやら、まさか他人事と見捨てるようなことはなからう、これも孝行だ、ひとつダメでもともと、相談に行つてみるだけ行つてみようと思つた。

そこで母の具合をうかがつてみると、たまたま気分よさそうにすやすやと眠っている。

「よし、今だ」

と、お菊は決断した。すでに冬の日はとつぷりと暮れていたが、諏訪町から田原町はほど近い。

宵のうちに一走りしてくればよい。行灯をともして、煎じた薬を帰ってから飲ませるために用意しておき、さあ、でかけようとするそのとき、どうしたことか風もないのに行灯の火がふうと消えた。お菊の心にふと嫌な予感が走った。が、逡巡している場合ではない。また火をともして、門の戸を固く閉ざして出た。

師走の末である。ぴゅーっと吹き付ける寒風、正に身を切るごとし。お菊はこのところの貧乏暮らし、持っていた着物は残らず売り払い、自分の着物といえど今着ている垢じみた袴ひとつ、それに前垂れ帯だけであった。彼女は肌を刺す木枯らしに耐えて、半ば吹き転がされるように田原町の花房屋へやってきた。店先には客がいて、いかにも取り込んでいたので、彼女は裏へ回り、勝手口からそつと家の中をのぞいた。

どうやら花房屋では、今日は手伝いも来て、大勢でにぎやかに餅つきである。おそなえを拵える者、のし餅をのす者、なますを打つ者でてんてこまいの忙しさであった。これを見てお菊は思わずため息をついた。

「ああ、昔神田に店があつた頃は、ああして毎年賑やかに年越しの支度をしたものだった。わずかの間にこんなに落ちぶれてしまうというのも、前世の因縁というものかしら。それにしても、お衆さんは、これほどお店が繁盛しているのに、たった一人の母様の貧苦を見て見ぬふりをなさるとは、なんと薄情な、どういう神経をしておいでなのだろう。まして何かと自分の都合ばかり言いたるとは、鬼か蛇のようだ、全く情けない」

と思わずグチが口をついて出るのだった。